

*ボタニカルアートとは
植物を実物大の大きさと正確に描くこと。16世紀ヨーロッパに広まり、日本では昭和45年頃に太田洋愛氏等によって広められた。

杉崎 文子さん 杉崎 紀世彦さん

夫婦で描く ボタニカルアート



夫婦二人三脚で仕事をしてこられた二人。これまでの道のりは、どんな道だったのでしょうか。



から飯食えるんだという考えが当たり前のことと思っていた。
オレが家に着いたら直ぐ飯を食べるよ
うに。みそ汁を直ぐ飲めるように、魚も
焼けていないとだめ、と。店ではにこに
こと笑顔でいたがあれは商売の顔！(笑)

電話のワン切りはオレが元祖

紀世彦さん 電話でベルを一つならして受話器を置く。オレが帰るといふ合図。何時に帰るかは分からない。時には、お客を連れて行くこと

りの人にも、何でもはいはいと聞いておけばそれでいいと言われたが私はそうじゃないと思いついて続けた。しかし、紀世彦さんは小さい時から苦勞を重ねてきた人で基本的にはやさしい人。

動き出した文子さん

…仕事にいちずなだけの紀世彦さんを文子さんは夫婦で参加するある講習会に誘った。それが人生を変えたと素直に紀世彦さんは認めた。
文子さんは危機感を感じていたもので何年も前から夫婦で参加する講習会に誘っていた。しかし子供が産まれたばかりの頃、金、土、日の仕事のかき入れ時に、オレがいなければとの思いから3日間の講習会への参加を拒んだ。その時文子さんが涙を流した。それを見て考え直して参加する事に。そこで自分の行動、24時間を分単位で書き出さないと言われ、家族を養っている自分だからいかに仕事に熱心かを意気揚々と書いてきたところ、今度は夫婦の対話を書きなさいと言われて、はたと困ってしまった。無い、対話が無い。シヨックだった。夫婦の対話など考えてもいなかった。

文子さん 意のままになる時代があったのよ。かがかが(びくびく)する日々だった。私の思いを告げると何でも反対すると言われた。周

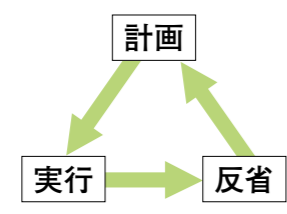
母校(県立長井工業高等学校 定時制)の「閉校記念の日」に、歌手の坂本九さんの参加(ボランティア)を頂く事に精

*ボタニカルアートとの出会いのきっかけは偶然の重なりと文子さんの後押し

文子さん きっかけを作ったのは紀世彦さんですの…

紀世彦さん 30年程前職場で窓際に立つてしよぼんとしていた時に星野富弘さんの「風の旅」に出会い感動して絵を描き始めたものの、全く絵を描いた時がないので描けなかった。偶然に松本キミ子さんの「三原色の絵の具箱」という本に出会い三原色で絵をかき始めた。最初の頃は幼稚園児の絵よりも下手だった。一年ほどした頃ようやく絵らしくなり母親に見せたところ、文子さんが上手に絵を描くことを知っていたので「親に嘘つくな。お前の絵じゃない、文子の絵だろ」と言われた。それでも絵を描き続けているうちに偶然に新聞で、日本のボタニカルアートの創始者太田洋愛氏を知った。剣道の世界(当時剣道を習っていた)ではどの先生でもお願いしますと言え竹刀をまじあわせて貰えたことから指導を仰ごうと思いを告げた時、文子さんは「どうだろうか」と首を傾げた。が、太田氏の奥様が電話口に出られると「弟子はとらない」と簡単に断られるところなのに、偶然に息子さんの奥様が出られて当初弟子入りは断られていたのだが、話が進むうち何かを感じとって下さったのか太田氏に電話が通じてその後絵を見て御指導をしてい

力的に行動し、彼を自宅に招く等、充実した一週間の休みをとり職場に復帰したところ、なんと机が無い。それまで数字に心を燃やして会社のために休みも取らず働いていたのに…。その後、数々の口にも出せないようなことがあり、あまりの冷遇に退社を決意。
「新しいことは、やってみなきゃわからない。死ぬ気になってやってみようよ」
文子さんの彼の背中を押す言葉が嬉しい。給料の無い生活を不屈の精神で切り抜ける家族の姿には胸を熱くする。その当時の辛さを笑顔で話し合える今、二人三脚で作った世界は正に互いに支え合った結果なのだ。そして今、文子さんは「ボタニカルアートは無制限、と賭けた紀世彦さんは開拓者です。」と。



で結び話し合うこと。これが続いたからこそボタニカルアートの法人化にこぎ着けられた。と

男・女・共同・参画と敢えて言わなければならぬ事に違和感を抱きながら文子さんは「紀世彦さんは変わってくれました。男女(おとおんな)を意識せずにはいられません。戦前戦中派の意識を植え込まれ

ただくことになった。奇跡が重なった。自分が花の絵を描けるようになったころ側で見ていた植物の大好きな文子さんが、これは私の世界だと植物画を描き始めた。彼女は植物が好きだし詳しいし誰も敵わないと思うよ。新芽が出ただけでも、枯れた葉を見ても植物の名前が判断できる。描き時が分かる人。何時描くか、どの角度から描けばいいかわかる人。

男上位の世界をひた走りしていた紀世彦さん 疑問を抱き正した文子さん

…お互いを「さん」付けて呼び合い、絵の製作は主に文子さんがやり、紀世彦さんが企画、営業をするようになった現在だが、以前は誰もが信じられない時代があったという…。それは徹底的な男尊女卑。

オレが稼いで食わしてやっつんだ!

紀世彦さん 男がゴミ袋運ぶなどもつてのほか。あれは女のする仕事とさげすんでいた。子供が泣けば夜中でも「オレには明日仕事がある。泣かせるな、外に出ろ」のひとこと。結婚するとき条件の一つに、この先どういう状態がおきようとも、人前で決してオレの悪口を絶対言わない! だった。当時の自分には売り上げの数字しか頭に無い。オレが働いている

てきてしまった時代の人は改革が必要で「そうきたか」と紀世彦さん(笑)もちろん女性も変わるべき所は変えなければなりません。

お互い気持ちよく生きて行くことなのです。この意識が持たれて歴史は浅い。共同とは一緒ではない。互いの役割を生かす事、人間としてどうあるべきかなのです。」と。

ボタニカルアートの魅力は?

文子さん 花の不思議さです。植物の一生は人間と同じ。春に芽を出し冬になるまでのあいだ一生懸命に実を实らせる、その賢明さに心打たれる。私達と地球の上で共生しているのです。葉っぱの中には全宇宙がある。植物を通して生き方を教えられてきた。感動です。

紀世彦さん 大勢の方々とお会い出来ること。68歳で現役。これからも現役です。そして絵は残ります。



念願だった「工房」完成
山形市門伝山王。
富神山の麓、山形市内を一望できる高台に念願だった工房が3年前に完成。